NIE 教育に新聞を 全国大会

広がる活動 広がる可能性

「第21回ＮＩＥ全国大会大分大会」は4日、大分市のホルトホール大分で全体会があり、芥川賞作家で立教大学文学部教授の小野正嗣さん（佐伯市蒲江出身）による記念講演「言葉に触れる、言葉で触れる」や、堀泰樹・県ＮＩＥ推進協議会長による基調提案、「楽しくなければＮＩＥじゃない！～私たちはなぜ新聞活用に取り組むのか　その意義と実践のこつ～」をテーマにしたパネルディスカッションなどがあった。記念講演や基調提案の要旨、コーディネーターやパネリストの主な発言内容を詳報する。

記念講演　言葉に触れる、言葉で触れる

作家・立教大学文学部教授

小野正嗣さん

あらゆるものを包む

「読む」とは普通、本を読むことでしょう。

フランスの画家フラゴナールの「読書する娘」という絵があります。若い女性が本を読んでいる姿を横から描いたもの。つまり、富裕層ではありますが、18世紀後半のフランスでは読書が絵画の主題となるほど一般的だったのです。僕が生まれ育った大分県南部の海沿いの土地では、大人が本を手にしているのを目にした記憶がありません。

ですが「読む」ことと無縁ではありませんでした。

大人たちは新聞を読んでいたのです。祖父母は畳や飯台の上に広げた新聞の前で、あぐらをかいたり正座をしたりして、前かがみになって読んでいました。ペンで線を引き、切り取ることもありました。

読むだけではなく、新聞紙にはさまざまな用途があります。幼い頃はよく、魚の干物が包まれているのを目にしました。美しいものから汚れたものまで、あらゆるものを包む役割があるのです。

20代の後半から8年ほどパリ第8大学に留学し、フランスの地方都市で暮らしました。詩人のクロード・ムシャールさん宅に居候させてもらいました。夫妻は熱心な新聞の読者で、コーヒーの香りが漂う朝のキッチンで記事を話題に言葉を熱心に交わしていました。それは毎朝の儀式のようでした。

2014年6月、僕はイギリスの文芸フェスティバルに招かれました。そこでアメリカ人作家のアキール・シャルマから声を掛けられ、彼の小説「ファミリー・ライフ」を読んで驚きました。脳に損傷を受けた兄が登場するのですが、僕の兄も同様に故郷で闘病生活を送っていたのです。

兄は新聞を読むのが好きでした。手術後、もうろうとしていても紙面を見詰めていたのです。どうしてそこまで執着していたのか分かりませんが、社会と、世界とつながるために必要な行為だったのでしょう。

今、インクルージョン（包み込む）とかインクルーシブという考えの重要性が語られています。インクルーシブな社会とは貧困や障害、性別、人種によって孤立したり排除されたりしない社会。共生社会です。

そこで、新聞が社会にとって大切な役割を担っていることが分かります。新聞とは何よりも包み込むものだからです。

新聞を編み上げる言葉が包むのは、美しいものや強いもの、喜びばかりではありません。むしろ差別され、虐げられた者たちの言葉にならない叫び。新聞はそんなこぼれ落ちた悲しみや怒り、痛みをしっかりと受け止め、包み込むものでなくてはなりません。

おの・まさつぐ　1970年、佐伯市出身。2015年、故郷を舞台にした中編小説「九年前の祈り」で第152回芥川賞に輝き、大分合同新聞文化賞特別賞受賞。

パネルディスカッション　楽しくなければＮＩＥじゃない！　～私たちはなぜ新聞活用に取り組むのか　その意義と実践のこつ～

「楽しくなければＮＩＥじゃない」をテーマに意見を交わすパネリストたち＝4日午後、大分市のホルトホール大分

小野正嗣さん

関口修司さん

塩川美紀さん

亘鍋早希さん

渡辺美加さん

佐藤由美子さん

佐藤　ＮＩＥや新聞とのこれまでの関わりについて教えてほしい。

小野　私にとって新聞とは一つの空気のようなものとして、いつも周りにあった。字を読むという基礎的な力や土壌は、日々の新聞を読むことによって養われた。

関口　「楽しくなければＮＩＥじゃない」というテーマに共感している。子どもにとって楽しい授業とは、タイムリーであること、リアリティーがあること、そして自ら成長を実感できること。教師にとって楽しい授業とは、子どもたちが主体的に、生き生きと学習する姿を見ることだと感じている。

没頭している姿美しい　小野

塩川　子どもたちにメディアリテラシーを付けさせてあげたい。自分も真実を見極める力を付けたいと思ったのがＮＩＥ教育をスタートさせたきっかけだった。

亘鍋　新聞に興味を持ったのは小学生の時。掲載されている4コマ漫画を読んだからだった。それまで新聞は、大人が読む辞書のようなイメージがあった。興味を持ってからは、ノートにスクラップを始めるようになった。

■■■

佐藤　ＮＩＥ実践者の楽しさについて考えたい。

塩川　今は情報化社会でいろんなツールがある。その一つとして子どもたちを新聞に出合わせ、将来への種まきをするような感覚で取り組むと、少しずつ楽しく感じるようなった。

佐藤　各学校ではどのような実践が進められているのか。

渡辺　県内ではここ数年、新聞教材の活用が広がっている。以前は社会や国語、総合的な学習の時間で扱われることが多かったが、今は算数や英語、図工などの教科での活用も増えてきた。対象も中学校、高校だけでなく小学校、幼稚園の段階から実践するようになった。低学年は記事を読めない子どもも多いが、気に入った写真だけを切り抜くなど発達段階に応じた内容になっている。授業の導入部分だけに使ったり、グラフやデータ部分を抜き出すなど使い方はさまざまだ。

大人数なら内容に深み　関口

佐藤　これからのＮＩＥ実践者に期待することや助言、感想は。

関口　ＮＩＥは組織で実践した方が良い。大人数で取り組めば、互いに情報交換ができ、内容に深みと広がりが出る。また、小学校、中学校、高校の連係も大切だ。本来はそれぞれ文化が異なるが、連係することによって系統的な指導が可能になるはずだ。

小野　新聞を読むことが読解力の向上につながり、社会への関心を高めることは体感としてあったが、実際にＮＩＥ教育の効果でテストの点数が上がったという例もあった。今後も自信を持って、学生たちに新聞を読むよう呼び掛けることができる。

亘鍋　私が初めてＮＩＥの授業を受けたのは小学校5年生の時。もう少し長い時間をかけて新聞に触れ合う時間をつくってほしかったと感じている。

種まきするような感覚　塩川

佐藤　これからの子どもたちには、社会の変化に主体的に向き合い、積極的に関わっていく力が必要。家庭で新聞を読む機会が少なくなっているからこそ、学校でＮＩＥに取り組む意義がますます高まっている。

■■■

佐藤　ＮＩＥへの子どもたちの感想や意見を聞くため、6月18日、小中学生8人を集め「大分県ＮＩＥ子ども会議」を開いた。

渡辺　子ども会議では、みんな堂々と自分の意見を述べ、他の参加者の考えを取り入れていた。ＮＩＥの具体的な活動を通じて、自分と友人との意見の違いを知り、尊重し合っていた。子どもたちには多様性を認める力が備わっている。会議を通して新聞教材が子どもたちにとって魅力的なものだと明らかになった。

亘鍋　会議に参加して自分の学校と違う取り組みがあることが知り、同じ新聞を使った授業でも内容が異なることが面白かった。新聞を通して、人と議論を交わすのはその人の考えを知る良いきっかけになる。自分の意見を伝えたり、他の人の考えを聞いて関心を持つことがすごく楽しい。

面白かった子ども会議　亘鍋

小野　新聞を開くと興味のない異物に出合うことができる。視覚的にも目に入り、興味のありかを発見できる。新聞は、多面的にその時の「今」が分かる。

塩川　子どもたちは会議で、他人の考えを聞いて、しっかりと論理の整った意見を述べていた。ＮＩＥの意義を子どもたちが真摯（しんし）に受け止めている。子どもの期待に沿えるＮＩＥを展開したい。

関口　会議で学ぶ子どもの姿や表情、言葉から、ＮＩＥで育った姿を実感した。教師の役割はＮＩＥ活動を継続すること。スクラップなどを通じて日常的に新聞に親しむ「ＮＩＥタイム」を全国に広めたい。

■■■

佐藤　今日の感想やＮＩＥの今後について。

亘鍋　ＮＩＥの学習は、社会とのつながりを持つことだと感じた。私が大学を受験をするときは受験で新聞を使った問題が出題される。もっと新聞を深く読んで、一つ一つの出来事に興味を持っていきたい。

渡辺　子どもたちは力を持っていて、それを引き出すことができるのがＮＩＥ。新聞の作り手の一人としてＮＩＥを発信することで大分に活動を根付かせたい。家庭でも親が活字や新聞を読む姿を見せることで、子どもにもその素晴らしさを教えることができる。

ますます高まる必要性　佐藤

塩川　子どもたちはＮＩＥを通じて、日常の生活にニュース感覚があふれてくる楽しさを感じている。大分はＮＩＥの種が芽生え始めたところ。その芽がすくすくと、どんなふうに育つのか楽しみだ。

小野　「ＮＩＥタイム」で子どもが没頭している姿は美しい。大切なのは、息苦しい世の中で子どもが我を忘れて楽しむ時間を生むこと。新聞を読むという行為は、人として生きていくために役に立つという明らかな意義がある。新聞や文学に触れるということは、人間が壊れないようにするための「隙間」になる。

関口　ＮＩＥを組織で取り組む重要性や効果を実感した。よりよい社会を目指す子どもにとって、社会と学習をつなぐ窓となるのが新聞。深く主体的に学ぶため、効果的に新聞を取り込むことがＮＩＥに課せられている。一層の組織化、見える化、日常化が必要だ。

子どもの力引き出せる　渡辺

パネリスト

小野　正嗣さん（作家、立教大学文学部教授）

関口　修司さん（日本新聞協会ＮＩＥコーディネーター）

塩川　美紀さん（日田市三芳小学校教諭）

亘鍋（わたなべ）　早希さん（大分市碩田中学校2年）

渡辺　美加さん（大分合同新聞社報道部教育担当記者）

コーディネーター

佐藤由美子さん（大分市寒田小学校長）

基調提案　社会と向き合うＮＩＥに向けて

基調提案をする県ＮＩＥ推進協議会長の堀泰樹大分大教育学部教授

大分県ＮＩＥ推進協議会長

堀　泰樹さん

主体的判断力を育む

大分の特色あるＮＩＥ活動の一つに、2003年5月から続く「飛び出せ学校・大分合同小学生新聞」がある。

小学生が地域を調べ、問題点を考え、新聞にまとめることで古里を見詰め直す企画。取材、原稿執筆、紙面レイアウトを通じ、新聞や取材、新聞作りの知識を教えてくれる取材記者や整理記者、取材対象となる地域の大人との関わりが必然となる。学びを新聞という形にすることで、地域や社会への理解が深まる。古里の魅力や自慢を知ってもらいたいという思いが、協働の学びを推進する。

次期学習指導要領の改定に向け、中央教育審議会がまとめた「教育課程企画特別部会　論点整理」では、特にこれからの時代に求められる資質・能力として「さまざまな情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力」を挙げている。これを実現するため、ＮＩＥの活性化を考える必要がある。

ＮＩＥは全教科、全学年で取り組むことが可能。学校全体で組織的に進める体制を整えることやＮＩＥのカリキュラム化、小中高の連携、学校図書館の機能充実が必要だ。主権者教育推進のため、社会の動きや課題を多角的・多面的に考察し、公正に判断する力を身に付ける、新聞を活用した教材開発も課題になる。

学校に新聞がある環境をつくり、全ての子どもたちが授業で新聞と出合い、新聞を読むようになればと願っている。子どもたちが社会の動きに関心を持ち、よりよい社会づくりに向かう力を育んでほしい。そのためにも新聞を活用したわくわくする授業づくりで意見を交換し、交流を通して学び合う場としたい。